

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 16 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520083

研究課題名（和文） ユダヤ系移民によるアナーキズムの形成と変容に関する研究

研究課題名（英文） Study on the Making and Changing of Jewish Immigrants' Anarchism

研究代表者

田中 ひかる（TANAKA HIKARU）

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00272774

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、アメリカに移住したロシア出身のユダヤ系移民の間で展開されたアナーキズムの形成と変容の過程を解明することであり、彼らの多くが移民を開始した 1880 年代から移民一世が運動の第一線から退く 1950 年代までの期間、彼らの間で支持されたアナーキズムの思想および運動を対象にした。その結果、移民する以前に獲得していたロシアでの経験、移民後にアメリカで新たに獲得した経験、ロシア革命に参加する中で得た経験、革命後にアメリカで得た経験が、アナーキズム思想の変容に反映されたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research investigated the process of making and changing of anarchism which supported by Russian-Jewish Immigrants in the United States, during the period of 1880s to 1950s. The investigator of this research concluded that the experience of Russian-Jewish Immigrants in Russia, or in the United States, what they learned in the process of immigration and what they knew from their cross-bordering Jewish immigrants' networks, had the strong influence on the making and changing of their anarchism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：社会思想史

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は従来から 1) ドイツ・アナーキズム史研究、2) アナーキズムの国境を越えた伝播に関する研究、3) 大杉栄とロシア革命直後のアナーキズム史に関する研究を進めてきた。1) では、著書『ドイツ・アナーキズムの成立』（御茶の水書房、2002 年）において、アナーキズムの成立要因が社会階層・職業・出身地域等の「出自」にある、という通説に反論し、出身地を追われ、亡命

者・移民として多くの場所を移動する中で、多様な言語・文化・知識を吸収して成立したのがアナーキズムである、という点を明らかにした。2) では、芸術家とアナーキズムとの関係や近年の反グローバル化運動におけるアナーキズムに関する論文により、アナーキストの主張が国際的に伝播していく過程を明らかにし、アナーキズムは「出自」に規定されるのではなく、グローバルに遍在・成立・伝播することを示した。3) では、国境

を越えるアナキストたちの活動を解明し、アメリカ在住のロシア系アナキストのほとんどが、革命以前にアメリカ合衆国に移民したユダヤ人であり、アメリカで初めてアナキズムを知りアナキストになった人々が多かったという事実を把握し、また、彼らの多くが、1917年2月以降ロシアに帰国し、同地のアナキズム運動における中核的メンバーとなるが、1920年代前半までに弾圧され、その一部はアメリカに帰還したことがわかった。

その後、科学研究費の分担研究（「移動と情報ネットワークの政治学」平成19-22年）において、1970年代に実施されたアメリカ在住のユダヤ系アナキスト約50名に対するインタビュー資料を分析した結果、彼らの一部は、1905年にロシアで革命を経験し、あるいは労働運動・社会主義運動さらにはアナキズム運動に参加していたこと、そして移民後には南北アメリカ大陸の各地で、労働運動から文化活動に至る多様な運動を展開していたこと、1917年にロシア革命に参加した際には、彼らは帰還したロシア人約5000名の大部分を占め、アメリカで学んだ思想や運動をロシアで展開しようとしたこと、アメリカに帰還後、旧来の暴力革命ではない新たな変革の方向を模索した、という点に関する基礎的情報を得た。

以上のような研究を進める中で、以下の諸研究から様々な示唆を得た。

(1) ロシア人アナキストに関する研究：ロシア革命期のアナキズム運動に関する唯一詳細な研究 P. Avrich, *The Russian Anarchists* (1967) では、ロシアにおいてアナキズム運動が成立してから壊滅に至るまでの過程が明らかにされ、史料・文献・研究史など多くを学ぶことができた。ただし、ロシア人アナキストの多くがアメリカに移民した後にアナキストになったという事実、あるいは、革命勃発後にロシアに戻って展開した思想・運動と彼らのアメリカでの体験とがいかに結びついていたのか、という点が明らかにされていない。

(2) 移動と経験の結合から思想を分析した研究：①B. Anderson は *Under Three Flags* (2005) で、多言語・多文化など多様な要素を内面化した「ノマド」としてのナショナリストとアナキストの特質の共通性を指摘しており、アナキズムという思想の形成と人や情報の移動との関連について多くの示唆を得た。ただし、国境を越える個人の体験が内面化される過程やその体験が個人の行動や思想に与えたインパクトについては検討不足である。②20世紀末以降、現代アナキズムの展開が「ポストモダン・アナキズム」

として再定義され、ドゥルーズ＝ガタリなどの影響により、革命とユートピアを目指すのではなく、「今、ここ」のあり方を問題化する多様なアナキズムの存在が把握され、移動を繰り返しながら多様性を内在化する「ノマド」、「新しいアナキスト」が議論されてきた (cf. R. J. F. Day, *Gramsci is Dead*)。ただし以上の議論は理論研究にとどまり、過去から現在に至る、国境を越えて移動するアナキストの思想と運動の分析に適用されていない。

(3) アメリカ・ユダヤ系移民史研究：最新の研究では、アメリカでの経験がユダヤ系移民の社会主義を生み出した、という点が強調される一方 (T. Michels, *A Fire in Their Hearts*, 2007)、移民前のロシアでの経験を重視する研究も現れているが (Hoffman et al., *The Revolution of 1905 and Russia's Jews*, 2008)、双方を結び付ける研究は未だ存在しない。また、ユダヤ系移民のアナキズムについては従来から他の移民集団のアナキズム以上にその存在が際立っていることがユダヤ系移民政治思想研究で指摘されているながら (J. Frankel, *Prophecy and Politics*, 1981)、この問題に関する研究はほとんどない。

アメリカのアナキスト180名中約50名のロシア出身ユダヤ系移民アナキストを対象にしたインタビュー資料 (P. Avrich, *Anarchist Voices*, 1995) に関する分析も本研究代表者の研究を除けば、管見の限りでは存在しない。

以上1)~3)から、従来国民国家の枠組みの中でのみ捉えられてきたアナキズムは「新しいアナキスト」に関する議論、B・アンダーソンの説を踏まえ、思想と運動を重層的・複合的に捉えねばならないこと、ユダヤ系移民のアナキズムが際立った存在であることが従来指摘されながら検討されていないことがわかり、そこから、本研究の課題・研究目的の設定に至った。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカに移住したロシア出身のユダヤ系移民の間で展開されたアナキズムの成立と変容の過程を解明すること、とりわけ、ロシアとアメリカにおけるユダヤ系移民の体験の結合のありかたと彼らが支持したアナキズムの成立と変容との関連を解明することを目的とする。

具体的には、ユダヤ系移民がロシアとアメリカで得た経験を、どのような形で組み合わせた結果、思想と行動が成立したか、それら思想と行動およびその変容には、それらの経験が思想・行動にどのように反映されているのか、という問題について検討することを通じて、彼らが展開したアナキズムの成立と

変容について明らかにすることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者単独で、国外での史料調査・収集・分析、および、国内研究機関での史料調査・収集による補完という方法で実施した。調査・収集・分析の対象となる史料は、アメリカ合衆国に渡るロシア出身のユダヤ系移民が急増する 1880 年代から、アメリカにおけるユダヤ系移民第一世代が第一線から退き始める 1950 年代の時期までのものである。

平成 21 年度は、準備調査にあてられ、国内研究機関での史料調査・収集をするなかで、国外調査活動の基礎的情報を構成するロシア・ユダヤ人関連文献およびアメリカ移民史関連文献を研究代表者の研究機関に設置した。国外での史料調査・収集として、アメリカ合衆国議会図書館 Library of Congress の 1) Rare Books and Special Collections 内にある Paul Avrich Collection、および 2) African and Middle Eastern Reading Room の 2 つのセクションに所蔵され、ユダヤ系移民アナーキストの定期刊行物と回想録などに関する調査を実施し、一部を複製した。

平成 22 年度は本調査であり、平成 21 年度の準備作業に基づき、国際社会史研究所 International Institute of Social History (オランダ) での史料調査を実施し、ユダヤ系移民アナーキズムおよび欧米アナーキズムの国際的連帯に関わる史料を調査・収集した。

平成 23 年度は、以上の調査をさらに補充するため国際社会研究所での調査を実施し、ユダヤ系移民アナーキズムおよびロシア・アナーキズム、アナーキスト赤十字に関わる史料を調査・収集した。

4. 研究成果

従来、アナーキズムという思想と運動は「工業化の遅れ」がある地域で生まれる、と言われてきた。しかし 20 世紀末から登場する「新しいアナーキスト」は、最新のテクノロジーを駆使して世界各地で反グローバル化運動に参加する欧米諸国出身の人々が大多数である。また、過去から現在に至るまで、多数のアナーキストが拠点にしていたのは、移民や亡命者が行き交う国際的な大都市もしくは帝国の首都であった場合が多く、たとえばドイツ語圏出身アナーキストの事例は、「工業化の遅れ」ではなく、むしろ移民や亡命といった「人の移動」とアナーキズムの成立との関係について検討すべきであることを示唆している。特に、「工業化の遅れ」の結果がアナーキズムを生み出した典型的な事例として取り上げられがちなロシア出身

のアナーキストの多くは国外に亡命しており、その多くがアメリカ合衆国にいた。

ここから人の移動とアナーキズムの成立との関係という課題が生まれる。

この点については、近年のイタリア系移民やスペイン系移民の研究、1880 年代以降の「初期グローバル化」という文脈の中でアナーキストが国境を越えたネットワークと多言語を媒介にして活動した、という B. アンダーソンの仮説が多くを示唆を与えてくれる。

それらを出発点にして、特にロシア出身のユダヤ系移民のアナーキストに注目すべきなのは、彼らが「工業化の遅れ」によってアナーキストになった、と明確な根拠もなく説明されてきたロシア出身者だったからであり、また、アメリカ合衆国に移住した「ロシア人移民」の大多数が帝政ロシアにおけるユダヤ人定住地域出身のユダヤ系移民で、その多くがアメリカに移住してからアナーキズムを支持するようになったことが推測できるからである。

彼らロシア出身のユダヤ系移民がアメリカで展開したアナーキズムは、1、アナーキズムを支持した人々の数が多く、2、労働組合、相互扶助組織、協同組合といった活動に参加し、イディッシュ語メディアを通じてプロパガンダを展開し、フリースクールおよびコミュニオンを設立した、という特徴があり、ロシア革命までの間に帝政ロシアで展開されていたテロや暗殺、掠奪といった活動に彩られていたアナーキズム運動とは全く異なっていた。また、彼らは、1917 年 3 月にロシアで革命が勃発したという報に接すると、家族を引き連れてロシアに帰還して革命に参加し、その中にはロシアから逃れて革命の経験を欧米で伝えた人びともいた。さらなる特徴としては、彼らの子孫から、Noam Chomsky、Murray Bookchin、David Graeber のように、新たにアナーキズム的な思想を展開する人びとが排出されたという点も挙げることができる。

Emma Goldman らも、もともとはイディッシュ語を話す帝政ロシア出身のユダヤ系移民であり、アメリカに移住した後、ドイツ系移民の Johann Most などから影響を受けてアナーキストになっている。アメリカに住む移民同士の間では、出身地のドイツやロシアではありえないような人間関係が成立しえた。同様に、ユダヤ系移民が帝政ロシアからアメリカに来なければ、イディッシュ語による社会主義やアナーキズムの定期刊行物によるプロパガンダも生まれなかった。

イディッシュ語によって語られ、書かれ、

読まれる社会主義やアナーキズムは、ロシアで活動する人びとに届き、様々な影響を与えたが、その中でも、イディッシュ語による社会主義とアナーキズムのプロパガンダを行うことは可能だ、というアイデアが移民先からロシアに伝えられたという点が最も重要である。

ロシア出身のユダヤ系移民たちがアメリカ移住後にアナーキズムを選び取った要因について整理すると、1、魅力的なアナキストとの出会い、2、日常的な他者との出会いと彼らとの会話、3、労働とは異なる「集い」の場とその親密性、4、社会主義思想・運動とアナーキズムとの対比、となる。

もっとも、ユダヤ人定住地域内で移動しただけでも、とりわけ Julia Singer Goodman のような女性は、家庭の束縛から逃れて新たな人間関係を取り結び、その中で知識や経験を獲得した、ということもわかる。

したがって、移動を通じて一定の自由を獲得した人びとが経験する出会いと交流、そして親密な人間関係の醸成を背景にしてアナーキズムを支持する心情が生まれていたと推測できる。

たしかに、従来ユダヤ系移民については、故郷を捨てて移民した後にアメリカ社会にとけ込んだ、といった点が強調されてきたが、今日では、彼らが故郷と密接なつながりを持つばかりでなく、世界に散らばる同郷者と結びついていて、という事実が明らかにされている。

なお、そういった人々を Sidney Tarrow は rooted cosmopolitan と呼び、20世紀末から今日に至るまで世界各地で見られる New Transnational Activism の主体と見なし、その起源の一つをユダヤ系移民活動家に見いだしている。このような視点から見れば、あめりかに「根を張った」、すなわちアメリカ社会に溶け込んだと見なされがちな人々でも、国境を越えた行動や認識に着目すれば、別の側面から移民を理解することもできる。

そうなれば、アメリカに「根を張った」と見なされるような移民がロシアに対する望郷の思いを持ち続けていたという事実、すなわち、「心情」が国境を越えていたという点についても注意が必要になる。そのような「心情」は、おそらくアナーキズムを支持する態度と関係する。それは、アナーキズムが当時から、国家や政党組織、階級や家族といった様々なシステムもしくは「支配」とらわれないことに価値を見いだす思想だったからではないかと考えられる。

以上のようなアナーキズムの成立と国境

を越えた移動・情報・ネットワークとの関係を考える上でアナキスト赤十字の事例は検討に値する。

アナキスト赤十字の起源は、19世紀末以来のロシアにおける政治囚・流刑囚の救援活動に求めることができ、当時から「赤十字」を名乗る団体が活動していた。

もっとも、1905年の革命以前、政治犯として投獄されていたのは、富裕な階層の出身者であったため、その支援は彼らの縁者によって担われていた。

ところが、革命期の運動に加わって投獄されたのは社会の下層出身で貧しい人びとであり、彼らを支援するには、家族の力だけでは限界があった。

ここから党派に関わりなくあらゆる政治囚を救援する活動が生まれ、国外では革命を目指す諸党派が合同で支援基金を立ち上げた。

だが、アナキストに対してはいかなる支援も行われず、ロシア社会民主労働党支持者が、アメリカなど国外の組織から囚人に送られてくる救援物資や義捐金を独占してアナキストに配分しないため、獄中・流刑地のアナキストたちが生命の危険にさらされた。

以上のような状況をアメリカやイギリスに亡命した人々が伝えると、これをうけて、最初にロンドンで1905年頃にアナキスト赤十字もしくはそれに類する組織が設立され、次にニューヨークで1908年頃にアナキスト赤十字が設立され、その後アメリカ各地で同様の組織が生まれた。

組織を立ち上げて支援した人びとは、イディッシュ語新聞『労働者の自由な声』およびロシア語新聞『労働者の声』と関わりのあるロシア出身のユダヤ系移民アナキストたちであり、彼らのほとんどが被服製造業に従事する若い労働者だった。

彼らユダヤ系移民は、「囚人支援ダンスパーティー」(arestantenbal; arestantenbeler; Arestantin Ball; Arestanten Ball) や、ハドソン川クルーズのような「エクスカージョン」などのイベントを開催し、そこで集められた収益金の多くをロシアの囚人に送り、一部は、囚人たちの手紙を公表するための雑誌を刊行することに利用され、さらには、囚人たちに手紙や書籍を送るための活動に使用された。

「囚人支援ダンスパーティー」は、1911～17年まで、毎年冬に開催されたイヴェン

トであり、13年以降は6~7千人を収用できる大ホールに会場が移された。18年にはアナキスト赤十字が主催した「政治囚支援ダンスパーティー Politisher defens ball」が開催される。

アメリカ司法省内捜査局(BOI: Bureau of Investigation)のエージェントによる報告からは、パーティーが夜の7時半頃から明け方の3時まで開催され、楽隊による演奏にのって若い男女が踊り明かしたということが想像できる。

パーティーの趣旨に添った出し物としては、「活人画」(lebende-bilder; lebendige bilder; tableaux)と呼ばれた、アナキスト赤十字のメンバーたちが演じる、ロシアで投獄されているアナキストたちにまつわる様々な場面の展示があった。

これらダンスパーティーに加え、1914年頃~16年頃まで毎年夏には、遊覧船によるハドソン川クルーズが開催されていた。船上ではバンド演奏、魚釣り、ゲーム、さらに食事の販売があったと推測できる。

パーティー会場に集まっていたのは多様なエスニック諸集団であり、ユダヤ系移民アナキストたちがエスニック・グループとしてアメリカ国内で閉鎖的な世界を形作ることに専念していたとは思えない。

また、アナキストが、ダンスをはじめとする多様なイベントを企画し、家族を連れて参加していたという事実は、1880年代のシカゴにおけるアナキズム・社会主義運動に関する研究で確認できる。

つまり、アナキスト赤十字が企画した様々なイベントは、アナキストあるいはユダヤ系移民という観点からではなく、遅くとも19世紀末から合衆国で広く見られた「労働者文化」の一部と見なすことができる。

イベントで集められた収益金は、ロシアに送金されたものもあったが、ロシアの監獄の劣悪さを知らしめるという目的で、囚人から送られてきた手紙を公表するためのイディッシュ語とロシア語の両言語で印刷された雑誌の発行にもあてられ、さらに、獄中と流刑地の人々に手紙を送り、彼らと文通する活動にも使われた。

そのような手紙を書くメンバーは、ロシアの監獄の規制と検閲をくぐりぬけるため、投獄された経験を持ち、ロシア語を書くことができる若者が選ばれ、60~100名程度

のメンバーが、一人あたり10名以上の囚人を担当して親族のふりをして手紙を書き、時には流刑地からの脱走の支援を行った。

1917年3月、ロシアで革命が勃発して臨時政府によって政治犯への恩赦が出され、亡命者とその家族の旅費を全て臨時政府がまかなう、という報に接した多くのロシア出身の移民たちは、家族を引き連れてロシアに帰還する。

アメリカでは1919年7月以降、司法長官パーマーが主導する左翼弾圧(Palmer Raids)が進行し、同年12月には、ゴールドマンらを含めて総勢249名が、22年11月には、シュタイマーを含む3名が、ロシアに強制送還される。多数のアナキストが加わっていたUnion of Russian Workers' in United States and Canadaやゴールドマンが編集していた『マザー・アース』誌は17年に警察の捜索を受けて消滅した。

ロシアでもアナキストに対する弾圧が強まり、ロシア国内では「赤十字」、およびアナキストらによる「黒十字Black Cross」が囚人・流刑囚への救援活動を始める。

またロシアを出国したゴールドマンらは、アナキストをはじめとする政治活動家たちに対するボリシェヴィキによる不当な弾圧と、ロシア国内の「政治的赤十字」が支援の対象としていないアナキストに対する支援を訴える声明を亡命先のストックホルムから世界に向けて発表した。

こういった事態を受け、1922年、ロンドンやニューヨークでアナキスト赤十字等の救援組織が再建され、また、ベルリンを拠点にしたアナキストや社会革命党左派が合同した救援組織も生まれた。

翌1923年、ロシアから帰還した人びとがシカゴで救援組織を立ち上げる。26年にニューヨークのアナキスト赤十字が消滅したため、その後、救援活動だけを目的とする組織は、このシカゴのものだけになる。

しかし、帝政時代と異なり、ロシアで投獄・流刑されたアナキストとの交信は困難を極め、39年頃には一切の交信が途絶えた。

以上の過程で、支援対象はナチに迫害されたアナキストやスペイン内戦後に亡命したアナキストらにも拡大され、第二次世界大戦終了後は、ヨーロッパ、日本や朝鮮のアナキストへの支援を行う。その遺産は、今日世界各地で活動している

Anarchist Black Cross を名乗る諸団体、あるいは様々な名称で活動するアナーキストによる囚人支援活動に受け継がれている。

以上のような事例から、移民の様々な経験とアナーキズムの成立・変容との関係を考えれば、次のようになる。

帝政ロシアに住むユダヤ系住民にとってアメリカへの移住とは、束縛からの解放であり一定の自由の獲得だった。そこから生まれたのが、多様な人びとに開かれた場における魅力的なアナーキストとの出会いであり、アナーキズムを支持する人々との自由で親密な関係と日常的な関わりであり、さらにはアメリカの「自由」を理想化しない、権力に対する分析の視点だった。

それだけに、獲得した自由の重みを強く意識する一方、故郷の縁者や友人との連絡を維持していた人びとにとって、ロシアにおける囚人・流刑囚をめぐる問題は、無視することができないものだった。

また、アナーキストたちは、他の救援組織、社会主義組織、ユダヤ系移民社会全体、さらにはアメリカ社会全体から排除され、攻撃されたため、孤立から脱するために言葉やエスニック集団の壁、そして国境を越えて関係性を取り結んでいく。

他方、10月革命以降にロシアで弾圧され、アメリカでも激しい弾圧を受けた経験などから、マルクス主義を支持する権威主義的社会主義、およびアメリカの「自由」を相対化する上での新たな視点を得た。アナーキズムを支持する心情は、このようなプロセスで醸成され、深化していった。

ロシアでテロ等に従事した人びとも、移民後はイギリスやアメリカに移民すると、相互扶助組織、労働組合、協同組合、フリースクール等の活動に加わっていった。こういったアナーキズムの思想や運動の変容には、これまで見てきた様々な経験が強く影響していたと考えられる。

1950年代まで存続した思想・運動がその後どのように展開したのかを解明するのが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

(1) 田中ひかる、アメリカ合衆国におけるロシア系移民アナーキスト -1880年代か

ら1920年代- (2009年度歴史学研究会大会報告 近代史部会「帝国秩序とアナーキズムの形成-抵抗・連帯の想像力」)、歴史学研究、査読無、No.859、2009年、96-105頁

(2) 田中ひかる、グスタフ・ランダウアーの描く国家と権力、そして「革命」、アナーキズム、査読無、13号、2010年、123-134頁

(3) 田中ひかる、ロシア出身のユダヤ系女性移民アナーキストについての考察-ジュリア・シンガー・グッドマンの生涯およびアナーキスト赤十字の活動、歴史研究、査読無、48号、2011年、97-138頁

(4) 田中ひかる、ロシアで投獄されたアナーキストを救援するための組織とその活動について-ニューヨークのアナーキスト赤十字を中心に1905~1920年代、歴史研究、査読無、49号、2012年、47-88頁

[学会発表] (計2件)

(1) 田中ひかる、アメリカ合衆国におけるロシア系移民アナーキスト-1880年代から1920年代-、2009年5月24日、中央大学、2009年度歴史学研究会大会報告 近代史部会「帝国秩序とアナーキズムの形成-抵抗・連帯の想像力」

(2) 田中ひかる、アナーキスト赤十字による活動1905-1920年-国境を越えるユダヤ系移民アナーキスト、2011年10月15日、九州西洋史学会、九州西洋史学会2011年度秋期大会シンポジウム「アメリカ移民労働史研究の再検討-ヨーロッパとアメリカをつなぐ視点から-」(『西洋史学論集』49号、2011年、135-136頁に要旨を掲載)

[図書] (計3件)

(1) ザビーネ・リッヒェベッヒャー著、田中ひかる訳、ザビーナ・シュビールラインの悲劇-ユングとフロイト、スターリンとヒトラーのはざままで、岩波書店、2009年、全463頁

(2) 小野一、田中ひかる、堀江孝司編著、政治を問い直す 第1巻：国民国家の境界、日本経済評論社、2010年、255頁(担当箇所：田中ひかる、人の移動と思想・運動の生成-ロシア革命前後のロシア出身のユダヤ系移民アナーキスト、229-247頁)

(3) 鳩澤歩、山根徹也、奥波一秀、北島瑞穂、田中ひかる、宗像せび、ドイツ現代史探訪、大阪大学出版会、2011年、全209頁(担当箇所：田中ひかる、規則を破るドイツ人、-マイノリティ・抵抗者・アウトロー、154-182頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 ひかる (HIKARU TANAKA)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00272774